

国 語 (B方式)

注 意

1. 問題は全部で9ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

次の文章を読み、後の問いに答えよ。

言語の形式そのものの中で主語を明確に示さなくても、会話にはほとんど支障を来たさないという日本語の特徴は、日本人の言語意識全体のかかえている大きな問題を暗示しています。ある言語の文法的特徴は、その言語を用いている民族の言語意識の反映ですから、日本語の文構造において主語の存在が希薄であるという明らかな事実は、そのまま、民族としての日本人の中に主語の意識が希薄であるということを示しているでしょう。

私たちはこのことから生じる問題を、現代においてもたえず経験しています。日本人が、よほど例外的な人を除いて、おしなべて外交上の討論が下手であり、できれば議論を避けたいと本能的に望む傾向があることも、このことと深くつながっていると私は思います。主語を明確に発し、他者を明確に自分と区別し、主格たる自分の自己主張を断固として貫くという行き方は、日本人の言語意識を誕生以来たえず養っている、「日本語」という揺りかごにおいては、Aと考えられます。

このような言語的特質が、日本の和歌、とりわけその最重要のジャンルである恋歌の中に、いわばもつとも濃密に凝縮された形であらわれていたのだと、結局のところ言えるであります。まさしく一民族の文化をもつともよく要約して示すのは、その民族の詩歌です。それが日本の場合には、他の何にも増して、恋の詩歌であったわけですが、日本では、恋歌がそのままの姿で風景詩でもあれば自然詩でもあったところが、たぶん世界のどこにも見られない独自の性格だったのです。

これを裏返して言えば、日本では、風景や自然を歌う「叙景歌」は、じつは本来恋心を歌う「抒情歌」として機能すべきものである場合が多かったのです。「万葉集」や「古今集」のごとき、もつとも古い、それゆえもつとも基本的な和歌の選集において、とりわけその性格は顕著です。

こういう叙景と抒情の一体化時代は、古くは七世紀頃の和歌以来大いにさかえ、十二世紀末までの平安時代を通じて、衰えることがありませんでした。

風景を純然たる風景としてとらえ、その動きや静止、光と影の多彩な変化、季節の推移その他を、まさに十九世紀印象派画家

の先駆者ともいふべきみごとな自然把握によって示してくれた一群の自然詩人たちが現れるのは、平安時代が幕を閉じ、武士を新しい主人公とする鎌倉時代が始まって約一世紀が過ぎた十三世紀末、十四世紀前半の時代です。

彼らの作品は、『玉葉和歌集』および『風雅和歌集』という二つの勅撰和歌集に収められています*ききょうてなめが、その代表者である兼伏見天皇、その妃、永福門院らの歌には、外光、外気のさわやかな感触の感じられる、自然の動的な把握による描写がありました。平安時代の叙景歌が、作者の内面風景そのものでもあるという、濃密な主観性によって塗りつぶされていたのに較べ、彼らの風景描写には、外部に吹きすさぶ新しい時代の風が吹き入っていました。

すなわち彼らの歌は、単に自然界を見る場合でさえそれを主観性の内側にかかえこんでしまうという行き方ではなく、逆に激しく変化する自然界の刻々の様相に対し、自ら精巧なカメラのレンズそのものになって写しとろうとするような、いわば

B 的態度を、はつきり感じさせるのです。

主観性の内側にだけ閉じこもって、明確な主体と客体の区別さえない抒情の世界にひたすら包みこまれていた、平安時代の長いまじろみの時はついに過ぎ去りました。帝王も貴族も、新しい時代の激しい動きに翻弄されつつある自分たちの位置に目覚めざるを得なかったのです。それがたぶん重要な内的要因でしょうが、彼らの歌にうたわれる自然は、とりわけ活発な動きに満ちていました。

伏見天皇の歌をとりあげてみます。

宵のまの村雲づたひ影見えて

山の端はめぐる秋のいなづま

伏見天皇

歌の大意は、「宵に入ったころ空を眺めていると、あちこちにむらがつている雲を次々に伝いながら、びかびかと光りつつ、秋の稲妻が山の稜線のあたりをめぐってひらめいている」。「影見えて」の「影」とは、元来光を指していました。ここもそれで

す。

稲妻は一箇所にとどまらず、次々に移動していきます。この歌はその光の変化や運動に心奪われた詩人が、自分の主観の表現などまったく考える余地もないくらい、その情景そのものに没入している様子をうかがわせます。

月や出づる星の光の変るかな

涼しき風の夕やみの空

伏見天皇

同じく伏見天皇の歌です。前の歌と同じことが言えます。夕暮れの星の光の明度が微妙に変化してきた気配をとらえて、

「C」と眩いているところに、繊細で鋭い感覚が遺憾なく発揮されています。

ここで私にとって面白く思われるのは、こういう鎌倉時代後期の歌の場合、平安時代の歌とは違って、歌の内容を³パラフレーズする必要がほとんどなくなっているということ⁴です。つまり、詩のことは一義的になり、表面の意味の背後に別の隠された意味を探る必要がないのです。

それは、これらの歌が純粹に風景を風景としてとらえるという態度で書かれているからです。言いかえれば、⁵近代以降の写実的抒情詩が、すでにここに予告されているわけです。私たち日本人にとって、『玉葉集』や『風雅集』の叙景歌は、五百年以上昔のものであるにもかかわらず、ほとんど時代の大きな差異を感じさせないほど親しく感じられるものです。それはなぜかといえ⁶ば、これらの歌が、詩人の内面の幽暗な消息には触れず、逆に外界を写しとる非常に精巧なレンズのものとなって、ひたすら風景と自然を客観的にとらえているからです。主観性と客観性とが溶けあつてかもし出す、深く暗い、内臓感覚的ともいふべき世界はここにはなく、明晰な視野が再び優位に立っているのが見られます。

次に、伏見天皇妃である永福門院の歌をとりあげてみたいと思います。彼女は平安時代末期の D と同様、日本の詩史の中で確固たる地位を占めている中世の大詩人でした。しかし、藤原家の大政治家を父として持ち、天皇の妃となった彼女

は、Dと同様、戦乱に次ぐ戦乱の時代を生きねばなりませんでした。夫の天皇の没後まもなく、朝廷そのものが二つに分かれて相争う、いわゆる南北朝時代が始まりました。個人的にも、彼女の周辺では次々に親族が死んでゆき、彼女は深い無常観にひたります。

彼女は当時としては長寿の七十二歳まで生きましたが、若いころからその作る歌は静けさに満ち、トウメイ^アな、いわば天上的なテイネン^イといったものが、作品の背後に感じられます。

山もとの鳥の声より明けそめて

花もむらむら色ぞ見えゆく

永福門院

「山のみもとで鶏や他の鳥たちが鳴き始めると、しだいに夜が明け初めてくる。山桜の花も、色の濃淡さまざまに、だんだん目に見えてくる」。「むらむら」は、ある部分は暗く、ある部分は明るくというように、むらがあること。

この歌でも、伏見天皇の歌の場合同様、詩人は見開かれた眼差しそのものにまで自分を還元し、外界の刻々の変化にびったり寄り添って動いています。彼女は眼の機能そのものと化しているのです。

言いかえれば、ここでは詩人のEは限りなく無に近づき、ひたすら澄明な眼差しになりきろうとしています。恋歌の場合に見られた「主語」の希薄化は、この場合にも徹底して押し進められているのです。

もう一首、彼女の歌をとりあげます。

真萩ちる庭の秋風身にしみて

夕日のかげぞ壁に消えゆく

永福門院

「萩の花が散っている庭、そこを吹いていく秋風が身にしみ入るようだ。折しも夕日がさして、その光が、壁に消えてゆく。」
ここで不思議に印象的なのは、「壁に消えゆく」という表現です。

通常の物理的現象としてなら、言うまでもなく夕日の光は壁の上で「しだいに薄くなり、やがて消え去るにすぎません。しかしこの歌の日本語表現それ自体からすると、夕日の光は、壁の内側に「しみ込んでゆく」というようにもとれるのです。本来固体である壁の内側に光がしみ込んでゆくということはありえないことですが、詩の中ではありえました。そして、このことは大いに強調すべきことですが、日本の詩歌では、この「しみ入る」感覚は、極めて愛された感覚なのでした。

(大岡信『日本の詩歌』による)

(注)

* 京極為兼…鎌倉時代後期の公卿・歌人。『玉葉和歌集』の撰者。(二二五四～二三三二)。

* 伏見天皇…後深草天皇の第二皇子。(一二六五～一三二七)。

* 永福門院…伏見天皇の中宮。父は太政大臣西園寺実兼。(一二七一～一三四二)。

問一 傍線部1「おしなべて」の意味として最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **1**。

- ① 想像するに ② 全体的に ③ 時として ④ 意識的に ⑤ 一つの例外もなく

問二 文章中の空欄

A

に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は

2。

- ① 一貫して保たれていた
- ② 不思議なほど嫌われていた
- ③ あまり明確な形では育たなかった
- ④ それなりに重要なこととされていた
- ⑤ 一部の人の個人的傾向にとどまっていた

問三 傍線部2「日本では、風景や自然を歌う」叙景歌「は、じつは本来恋心を歌う」抒情歌」として機能すべきものである場合が

多かったのです」とあるが、この文章の筆者は別の所で、

★「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね」香やはかくるる」(『古今集』春上 凡河内躬恒)

という和歌について、美しい女性を恋している男が、相手の保護者によって妨害されている構図の隠喩と見、「この歌の主人公は、恋しい女の「色」は邪魔者たちによって隠されてしまったが、それでも彼女の [] は、彼女の存在を雄弁に示しているのではないかと、あきらめきれない思いを訴え、かつ女を賛美しているのです」という解釈を示している。

I 右の引用文の [] に入る一語を、★の歌の中から抜き出して示せ。解答用紙(その2)を使用。

II ★の歌の中の傍線部「ね」を終止形に改めよ。解答用紙(その2)を使用。

問四 文章中の空欄 B に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は

3。

- ① 客観主義
- ② 自然主義
- ③ 主情主義
- ④ 退嬰主義
- ⑤ 理想主義

問五 文章中の空欄

C

に入る和歌のことばの訳文として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解

答欄番号は 4。

- ① 月が出るのだなあ。
- ② 月が出るかもしれない。
- ③ 月が出るといいなあ。
- ④ 月が出るのだろうか。
- ⑤ 月が出てしまったなあ。

問六 傍線部3「パラフレーズ」とは、ここではどのような意味か。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解

答欄番号は 5。

- ① 深く理解すること。
- ② 拡大して解釈すること。
- ③ 現代語に改めること。
- ④ 別の意味に置き換えること。
- ⑤ 自分の感覚でとらえようとすること。

問七 傍線部4「一義的」とは、ここではどのような意味か。最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **6**。

- ① 単調で深みがないこと。
- ② 無意識に表出されること。
- ③ 意味が一つに限定されること。
- ④ 理性的で安定していること。
- ⑤ 翻訳できない特殊性を帯びていること。

問八 傍線部5「近代以降の写実的抒情詩」とあるが、近代の短歌において写実主義を提唱した歌人は誰か。最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **7**。

- ① 石川啄木
- ② 北原白秋
- ③ 正岡子規
- ④ 与謝野晶子
- ⑤ 若山牧水

問九 傍線部6「詩人の内面の幽暗な消息」とはどのような意味か。最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **8**。

- ① 歌を詠む人の胸の中の憧れや情熱。
- ② 歌を詠む人の心の中にある複雑で微妙な思い。
- ③ 歌を詠む人がかかえている暗い絶望の気持ち。
- ④ 歌を詠む人が持っているコンプレックスやトラウマ。
- ⑤ 歌を詠む人が経験的に蓄積してきた感情。

問十 文章中の空欄 **D** に入る人名として適切なものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **9**。

- ① 阿仏尼
- ② 和泉式部
- ③ 小野小町
- ④ 式子内親王
- ⑤ 額田王

問十一 傍線部7「無常観」とは、どのような意味か。三十字以内で説明せよ。解答用紙(その2)を使用。

問十二 文章中の波線部ア「トウメイ」、イ「テイネン」を漢字に改めよ。解答用紙(その2)を使用。

問十三 文章中の空欄 E に入ることばとして最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は

10。

① 空問認識

② 時間意識

③ 自然感覚

④ 自我意識

⑤ 外界把握

問十四 本文中に掲げられている永福門院の二首の歌に共通してみられる技法は何か。適切なものを、次の①～⑤から一つ選

び、記号をマークせよ。解答欄番号は 11。

① 掛詞

② 縁語

③ 序詞

④ 擬人法

⑤ 係り結び

